コロナ禍における地域活動の評価と課題

―アートプロジェクトを事例としてⅡ―

宮　嶋　達　也

星槎道都大学研究紀要

美術学部

第３号

2022 年

The Bulletin of Seisa Dohto University, Faculty of Fine Arts
No.3, 177－190, 2022

コロナ禍における地域活動の評価と課題

―アートプロジェクトを事例としてⅡ―

宮　嶋　達　也

要約

新型コロナウイルスの感染拡大で外出自粛の要請が続く中，活動拠点となる施設ではなかなか地域活動は行えない。活動内容のメインであるワークショップでは３密になることが多く，施設などでの対面的な活動や人と人との交流活動が難しくコロナ禍はこれらの活動にも多大な影響を及ぼした。

こうした状況下で，コロナ禍でできる活動を考え，どのように実現させていくかなど，様々な課題と向き合いながら，地域活動の進め方を模索した。

通常とは異なる環境で異世代交流の輪を広げることを試しみ，新型コロナが地域活動に及ぼす影響と課題について考察した。

１．はじめに

2020 年 2 月から本格化した新型コロナウイルス（COVID-19）感染症の拡大は，大学ならびに学生たちの日頃の活動や生活にも大きな影響を及ぼした。授業をリモートにて実施することや登学の制限など，様々な対応が取られた。2021 年の今も感染の状況はかなり納まりつつあるが，変わらず完全にウイルス感染が終息する目途は立っていない。

こうした中，学生による地域活動も対応の変更を迫られた。学外での活動の多くは制限され，スポーツ部の活動やサークル活動も含め少なくとも緊急事態宣言下においては，ほぼすべての活動停止を余儀なくされ，学生生活全般においても多大な影響を及ぼしている。

しかし，このような状況においても，「新しい生活様式」を前提とした社会への変化が求められている。今までの多くが対面による活動の中で，他者との身体的接触の制限や社会的距離をとることが求められるなどの制限がある中でも，学生たちができることが全くないわけではない。「こんな有事の中でも，何か活動ができるのではないか」「こんなときだからこそ，何か残したい」という思いをどのように実現させていくか。そこには必ず新しい方法があると考え，感染拡大を防止しつつ，社会の課題と向き合い，その解決につながる活動への関わり方について考えることが必要である。

今回，地域活動に取り組む学生たちが，このコロナ禍での活動をどのように乗り切っていくのか，その過程で出てきた課題をどう克服していくのか，併せて，感染症や災害など今後もさまざまな危機が想定される中で，ウィズコロナにおいて大学と地域の繋がりを通して地域活動を模索してことが重要である。大学における地域活動をどのように展開していくか，学生地域活動の在り方について考察する。

２．学生地域活動が抱える課題

コロナ禍の制約下において，「新しい生活様式」を前提とした社会への変化が求められているいま，今までとは同じ形式の活動では困難な状況にある中で，地域活動の方向性が問われている。特にコロナ禍では以下の２つの課題を考えることが求められた。

２-１　財源の確保

本地域（北広島市）でのワークショップ活動が学生のみによる活動にとどまる場合，活動にかかる資金をどのように確保するのかなどの問題が生じる可能性があった。ここ数年間は資金確保のために北広島市の「学生地域活動支援事業補助金」への申請を行った。

この事業は地域活動事業等を行う学生団体に対して補助金を交付することにより，学生を中心とした自主的な活動を支援し，学生と市との協働及び人的資源の活用による地域の活性化を図ることを目的とするものであり，定義の中には，「地域活動事業等，市におけるまちづくり及び地域の活性化を図る目的で実施する事業をいう」とある。

補助対象団体は大学等（大学・大学院・短期大学）にある学生団体のうち，以下の団体とし，①教員等が指導するゼミナール　②教員等が指導するサークル活動団体

等がある。

補助対象事業は①環境活動に関する事業　②地域福祉に関する事業　③教育・文化に関する事業　④環境・産業に関する事業　⑤その他まちづくりに関する事業であり，当活動内容では③教育・文化に関する事業が我々の活動に当てはまるものであった。

しかし，昨今の新型コロナウイルスの影響もあり，支援事業活動自体が感染拡大を生む可能が有るという見解から 2021 年度及び 2022 年度の補助金が学生団体に対しての交付を中止することとなり活動するにはさらに難しい事態となった。

このような緊急性のある事態に対して外部からの補助金の交付申請受けることが非常に難しいことが今回このような事態に関わることで認識することができ，今後活動を行う上での課題にもなることが考えられる。

2－2　コロナ禍による活動受け入れの中止

連日のように感染拡大が続きクラスター発生のニュースを見聞きする中，活動自体行えるのか，施設を訪れることに対し感染する危険性は無いかなど，多くのことを考えていました。感染防止対策をしっかりした上で臨み，今の状況が落ち着いてくるようであれば決して不可能ではなく，この時期だからこそ学ぶことができる多くの学びもあるに違いないと感じていた。

しかし，現実は厳しく今回３カ所の施設で活動の提案をさせていだき受け入れをして頂いたが，そのうち２つの施設から感性拡大に伴い活動を決行させるのは難しいという判断が下った。活動の１か月ほど前の出来事ある。そこからの変更の立て直しはかなりハードなものでもあり，学生たちのモチベーションが一番心配であった。変更に関しては，活動実施期にも記した通り，実施活動に関しては密になると考えられるワークショップから密にならないような工作キッドなどへの大きな変更点はあったが，幸い大きな問題点とはならなかった。その後，活動実施可能な１施設にコロナ感染対策の話し合いを持ち，距離を置いた形で活動実施は可能となった。

学生にとってはコロナ禍における世間の見方，考え方”を肌で感じることとなりました。それが彼らにとって，良い体験か否かは判断が難しいものの，世情を知ることと，「どのような活動であれば安全にできるか」を，少しでも感じてもらえる出来事であった。

予想できない困難もあり得る時期ですが，グループで話し合い協働しながら，活動内容の変更点を探り活動実施できる方向に進めていかなければならない時期であった。

はからずもコロナ禍で得られたリモートでの活用は，事前学習期での教育促進につながっており，コロナ禍収束後も，この「対面＋オンライン」というハイブリッド化は，新たなかたちとして浸透していくと考える。

難しい判断を迫られるなかではありましたが，このようなかたちで活動を実施したことにより，学生が「新たな気づき」を得たことは間違いなく，「学びを止めない」実体験である。

地域活動は多様なものの見方・考え方を働かせる「学びの場」である。予測困難な時代に，学生が主体的に判断し，解決していく力を身につけていく実体験ができること，それが地域活動の意義と言えるのである。

３．学生地域活動の実態

3－1　事前学習期

地域活動は準備を含め５月～７月の事前学習期間，９月から 12 月までの計画準備期間として週に一度活動が行われ１月及び２月を実質的な活動期とした。

５月から７月の時前学習期間ではコロナ禍の影響によりほとんど対面で集まり活動することが許されない状況であり，すべてがリモートのみの活動となった。

ここでは主に企画・立案をメインとして教員サイドから企画の制作について時間をかけて各グループがプレゼンテーションをしっかりできる段階まで押し上げた。

Teams 内でグループ化し，そこで会議を開いて個々の意見を出し合った。今回はデザイン学科２年生 20 名が４つのグループに分かれてそれぞれ企画を出しあった。

計画期間である９月に入る前の７月末に各グループが企画した活動内容のプレゼンテーション行った。そこで他教員にもお手伝いいただき企画内容のブラッシュアップを試みた。

3－2　各グループのブラッシュアップ前の活動企画内容

グループ A

ダンボールで遊べる，ふれあいワークショップ

「段ボールで楽しいを作ろう！」

イベントの趣旨

―アートの素材は身近なところに。

身近にある段ボールでアート作品を制作し，参加者が素材の面白さや試行錯誤する楽しさを感じることができるイベントを企画しています。

〇想定している参加者年齢　　５歳～６歳（年長）

イベントの構造
○参加者，学生が作品を制作する⇒制作する楽しさ
○制作した作品を展示する⇒鑑賞する楽しさ
○他者の作品と交換する⇒認めあう楽しさ

具体的な展開内容
1．参加者に飲食店をテーマにした作品を，段ボール等の素材を使って自由に制作して貰う（60 分）
2．予め学生が作った作品を店舗に模した展示場に展示し，参加者に好きな作品と物々交換して貰う。（15 分）
3．さらに参加者の作品を，別な参加者が物々交換していく。（15 分）

イベントの目標
① 最高の楽しいを作ろう。アートと触れ合うことで，参加者を笑顔にしよう。
② 身近な素材から制作できることを知ってもらい，遊びの幅を広げよう。

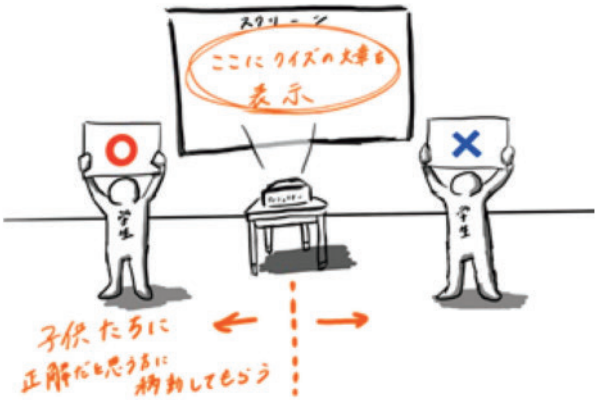
ファストフード店をモチーフにした作品例

素材として使う段ボール

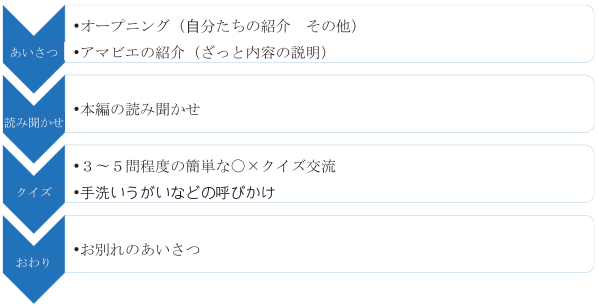
ケーキ屋をモチーフにした作品例

グループ B『デジタル紙芝居プロジェクト』
○概要
- 子供達にオリジナルのデジタル紙芝居を読み聞かせするというもの。
- 紙芝居の内容は「手洗いうがいを促す」（のちに説明）で，紙芝居を通して手洗いうがいなどの大切さを知ってもらうというもの。
- プロジェクト当日の内容としてはデジタル映像なのでスクリーンにプロジェクターなどで写し，学生がその場で読み聞かせをする。のちにクイズを出題。
- 所要時間 30～40 分くらい（うち読み聞かせ 15 分くらい）
- 紙芝居はパワーポイントで作成，子供達に楽しんでもらえるよう動く工夫をしたもの。
- クイズは○×形式で，○のゾーンと×のゾーンを設け，子供達に移動して回答してもらうというもの。５問くらい出題予定。

※クイズは手洗いうがいに関することや物語の内容を問うような内容。



○当日の流れ



○目的とコンセプト
- 子供達が手洗いうがいなどの大切さや必要性を理解することで，進んで実行してもらえるようにする。
- デジタルなどの動かせる工夫をすることで，子供達に視覚的に楽しんでもらう。
- 紙芝居を作る際，子供達に伝えるためにはどうしたらいいのかを考えることによって，自分たちの表現の幅を広げるきっかけを作る。

○物語内容
- コロナの影響で流行った疫病から守る神と言われている「アマビエ」が主人公。
- アマビエが男の子の体の中の菌と戦い，菌から男の子を守るという内容。
- ちょっとした面白い展開も混ぜて見ても飽きないよう工夫。
- 絵が動くように工夫。

＊後にやることが決定したら脚本等を渡し，内容を確認してもらう。

○幼稚園・保育園さん側でお願いしたいもの
①　プロジェクター（なければこちらで準備します）
②　スクリーン，または写せる壁などといった場所

○企画を実行する際の感染症対策
●　現地での対面で行う際は十分に距離を取り，なるべく園児と学生が離れるよう配慮いたします。その際画面が小さいと見えにくいので大きな画面で写せるように工夫したいと考えております。
●　読み聞かせに伺う学生はマスクなどの着用を必ずし，読み聞かせ等に心配となりやすい飛沫感染の予防を徹底的に行うよう配慮いたします。
※園内での活動が難しい場合は，リモートで行うことができます。

グループＣ「リサイクルモザイクアートを作っちゃおう！」
対象年齢：年中～年長
●園児の参加人数：10 人～30 人
●こちらで用意するもの：紙や布などの細かい素材，魚の形の台紙，大きな水中を模した画用紙
●用意してもらうもの：のり，（場合によってはハサミ）
●活動内容「簡単なモザイクアートの制作」園児に魚の形をした台紙から好きなものを選んでもらい，こちらで用意した切り紙や布を貼り付けて１人１つずつ魚を制作してもらう。その後，完成した魚を大きな水中を模した画用紙に貼り付け，１つの作品に仕上げる。

●企画進行の仕方
学生スタッフは，作品制作の全体的な説明とハサミを扱うときの安全面での指導を行い，アドバイスなどを求められた時は，サポートに真摯に取り組む。基本的に園児の自主性を尊重するため，作り方の強制は行わない。

●感染対策
学生スタッフは，アルコールスプレーを常備し，マスクを常に着用する。
今回の企画は，基本個人での制作活動となるが，最終的に１つの作品に仕上げるため，その際に園児が集まりすぎないよう配慮する。

●保護者向けプリント作成について
今回用いた素材は，家庭で使用しなくなったものを主にしており，それを再利用できるということを伝えたいため，後日保護者に向けてプリントの作成を予定している。データ又は現物でも用意可能。

グループＤ　カラフル段ボールハウスを作ろう！
●活動内容
段ボールを素材とした家のパーツを作り，その壁や屋根となる部分にステンドグラス風の装飾のある家をつくる。装飾及び組み立てる作業を園児と行う。

～完成予想図～

トンネル型にして通り抜けられる形にする。
春夏秋冬をイメージしたデザイン。

出入口に黒い布を付け，内側は黒く塗装して外からの光でステンドグラスが見やすく綺麗に見えるように。

★　目的みんなで一つの作品を作る楽しさを伝え，協調性を育む。
コロナ禍によって減少したコミュニケーションをとる活動を行いたい。

★　材料
Ａ）段ボール
Ｂ）カラーセロハン

C）黒い布
D）塗装用の絵の具
E）糊
F）ガムテープ

コロナ感染予防対策
●対面の場合パーツを分けてグループごとに制作することで密集しすぎないようにする。
●必要に応じて消毒。
●マスク，もしくはフェイスガードの着用。

3-3　計画準備期

これらの企画を持ってして各グループは活動実施前の9月から12月までは計画準備期間に入り，この期間から各グループが対面での作業に取り掛かるようになる。

事前学習期に行われた各グループの企画プレゼンテーションで指摘された部分の細かな調整を済ませながら作業は進んだ。この時期はまだ以前としてコロナ禍であり，この活動自体が実施できるかどうか不安に思う学生も出ていた。そんな中で少しでも学生たちの不安要素を解消できる行動として，今は活動実施可能な施設をまずは決定することが学生たちのモチベーション維持にも繋がると考え，本来は学生自ら活動させてもらえる場所も探し，そこで自分たちの企画を示し，そこの施設にてその活動が実施可能かどうかの判断を仰ぐところまで計画していた。

しかし，このコロナ禍では実施場所を見出すことは，なかなか困難な状況であると判断し，今回このような事態でもあることも考慮し，活動先の場所探しや施設との交渉の部分に関してはまずは教員が率先して関わるのが有効ではないかと考えた。

この状況下で学生によるファーストアプローチの出方によっては活動内容が良いものでも説明自体に不手際があれば活動自体が難しくなりえる。未だコロナ禍で緊張感のある中，このような形をとることとなった。

当初，４つのグループが各施設での活動を計画していたが，やはりこのコロナ禍ということもあり，最終的には4グループが1施設での活動実施となった。

自分たちの活動ができるという希望が持ててからは，少しずつ活動日が近づくにつれてモチベーションが上がり，楽しそうに制作している姿も見受けられるようになった。主に計画準備期間では素材の収集や制作物のサンプル作成，ワークショップを実行するうえでの安全性や感染対策など様々なシチュエーションを考えての作業である。

3-4　活動実施期

活動実施期間である1月～2月は更なるコロナ禍の影響が大きく11月から年末にかけて減少傾向にあったものの1月中旬にかけて感染者が増加しピーク迎え，そこを境にふたたび減少傾向にあった。

活動は様子を見ながらの対応となった。そんな中で幾度か活動拠点側と話し合いを持ちながら，今回の活動が今コロナ禍で必要なのか，活動自体は不要不急であり，やはり自粛することが最良の選択肢ではないのかなど頭を悩ませる期間でもあった。そんな中で当初4つの施設での活動を予定していたがこのコロナ禍の状況で話し合いを続けてきたが3つの施設が活動受け入れの中止を決断した。そこで計画期間中でもコロナの感染拡大の状況を見てワークショップなど密になりやすい活動グループは対策を講じる必要がでてきたが感染拡大の恐れは想定していたことでもあったため，その甲斐もあり，工作キットなどの案に変更するのはあまり時間を掛けることなくスムーズに対応できていた。

ただ，施設の受け入れ先が1か所となってしまったことは想定外であった。この施設の担当はBグループであり，Bグループはデジタル動画の紙芝居を作成していたのでワークショップとは異なり，密になることがなく，ある程度距離がとれることに利点があった。そこで実施施設と再度協議した上で残り3グループに関しても工作キットとして提供できるように考えて提案した。当日の活動実施日の学生は最小限に抑え，その施設を担当していたBグループと各グループリーダーのみの参加とした。

残念ながらBグループ以外はリーダーが工作キットの説明をしてそれらを手渡す作業のみとなった。昨年は大人数でのワークショップ活動が実施できており，その楽しさや，やりがいを経験しているだけに物足りなさを感じている学生たちの様子が伺えた。

Bグループの活動は当初大型スクリーンで上映する予定であったが施設側のトラブルにより急遽モニターでの上映となった。大型スクリーンからの変更だったため園児たちの盛り上がりに欠けるかと思っていたが，コロナ禍でのリアルタイムの内容ということもあり上映後のクイズなども大変盛り上がりをみせており，予想以上の園児たちの反響に学生たちの満足感は大きなものであった。

３－５　活動画像

工作キットの全体説明

作り方の説明

コロナ感染対策クイズ

デジタル紙芝居上映

最後にお別れの挨拶

４．コロナ禍で生じた活動と補助

一昨年までの地域活動は年度初めに行政へ学生地域活動事業申請を行い，そこで活動が採択された場合に限り補助金を受領できる。大学や大学教員サイドに補助され，その後に活動する資金として学生へと流れができる。

ただ問題点として補助金の申請が却下されることは珍しくありません。申請書を準備する際，指導教員は学生リーダーへの補助金申請プロセスを指導し，その重要性について教育する必要がある。申請書の準備には多くの時間と労力が費やされる。活動する当事者の学生たちだけでどのように資金の獲得を学生主体で考えていくのかなど，そこが活動を実施ための大きな課題のひとつでもある。

今回コロナ禍の影響で前文にも記したように学生地域活動支援事業の補助金の交付自体が中止となる事態が起きた。

ここで課題となっていた補助をどのように行政に頼らず活動を支えるかが大きなカギとなった。そこで学生が自ら活動拠点となる施設などに電話などでアポイントメントを取り，その施設で聞き取り調査をし，どのような活動が必要なのかを話し合いを持ちながら，学生自らヒアリングを行う。その調査を基にその施設に対して企画・立案することで，お互いの方向性を見出し自分たちに可能なワークショップはどのような形なのか考え活動を展開して行くのである。活動を提供する立場として補助の提供を活動拠点サイドに受けていただけるような形づくりが必要となる。

ここでは活動する側と補助する側との需給バランスが重要であり，企画・立案の詳しい説明が重要なポイントとなる。

通常行政サイドからの補助金の場合，オレンジの線がプロセスとして必要となってくる。

しかし今回のような行政機関からの補助がされない場合は点線枠内でのプロセスで活動を決行することができ

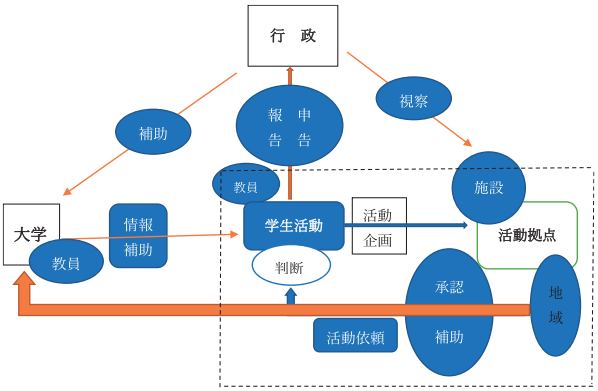


図１

る。直接活動拠点からの補助であれば，様々なプロセスが必要となくなり，行動が縮小されることにより，時間や活動の制限など大きく変わることでより快適に活動に集中することができる。ただ直接活動拠点施設に活動の提案を持ち込むにも様々な課題を解決する必要性がある。

5．学生の学びと課題

今回のコロナ禍で活動を続けて行くことで様々なイレギュラーが起き，修正すべき点も多く見受けられた。2020年度初め，新型コロナウイルス（COVID-19）の国内発生及び感染拡大を受け，多くの大学ではリモートを中心に，後期はリモートと対面授業のハイブリット形式で教育活動が展開され，十分な準備期間を取ることができないまま対面からリモートへの切り替えにより，学生への教育効果の担保は対面に比べて必ずしもできていたとは言い難い状況であると考える。リモートでの各グループによるディスカッションは，画面上で音声のみの話し合いをしてるグループがほとんであった。相手側の表情がわからないままではそう長い時間は話し合いが続くことはなく，時間が過ぎ，ディスカッションがある程度までになると，沈黙が多くなっているグループも多かった。リモートでのディスカッションの場合，画面上では最低限グループ内の仲間同士コミュニケーションを図るためにも相手が今どのような表情で話しているのか視覚情報を得ながら話すことは受け手に与える影響も大きいため，特に重要視されると考える。ただある学生に関しては普段対面では，ほとんど意見をしないような大人しい学生がリモートでは積極的に発言している様子が伺え，それは意想外であり，デジタルデバイスを通してのコミュニケーションであれば積極的に話し合いに参加できるのだと改めてZ世代の特徴を認識できたのではないかと考える。

また，今回はコロナ禍により3つのグループが簡易的な工作キッドなるものに変更となったが本来は1グループ20人規模が参加可能なワークショップの予定であった。その中である1グループの事例としてコロナ禍でなければ，最後まで活動を成し遂げることができなかったグループが存在する。そのグループは工作キッドに変更にならなければ実施することが難しい状況であった。そこには協調性，コミュニケーション能力，個々のモチベーションであったり，様々な要因が存在していると考える。まずは活動として様々な意見が飛び交うがその中で実際に本当に活動として成り立つのか，それを作り上げることが可能かどうかなどのあらゆる角度からの検証も必要にもなる。あくまでも自主的な行動を重視するため教員サイドは多くは助言しないがあまりにも企画の段階で制作におけるキャパシティを超えていると助言せざる得ないことが多々ある。「どれも重要なのですべて外せない」という学生からの意見もあるが，すべて行おうとして，どれも中途半端になるくらいであれば，やることを半分に減らして，残ったものに集中してクオリティを倍にする方が，得られるリターンが大きくやりがいに繋がるという考えを伝えるが，学生たちはなかなか理解しがたいのが現状である。企画を強引に進めるがために途中で活動準備が間に合わなくなることもある。十分に準備可能な時間は確保されているが時間を有効に使用できないことや見通しを立てて行動することが難しいのである。学生が中心に立案した企画で明らかに無理な企画であればわかるが，少し難しい企画ではあるが真剣に向き合えば可能であるような企画に関しては根拠もなく変更させることは難しいところである。

そこにはグループ内での人間関係や役割の責任，円滑なコミュニケーションなどが必要とされる。

その中で，制作準備に優先順位付けさせて，準備の段階においても多少の計画変更や見直しを行えるように細かな指導も大切になると考える。ある程度自主性を発揮できような余白を残しながらも道筋を立てて導いていくことが挫折回避への近道である。

6．振り返りレポート

本活動では「事前学習期」「計画準備期間」「活動実施期」の3つの段階を経て，各期の取り組みなどの流れや活動内容などを振り返りシートにて自由記述としたものである。

学生A

二年生になって取り組んだ地域活動を一から計画することにより，本格的に「社会に関わるデザイン」に触れてきました。その結果，使用ソフトや機械の使い方を実践的に学習することができたり，大きな造形からデジタル化された紙芝居づくりの研究まで幅広い経験を積むことができ，これらの体験はきっと将来決して無駄になることはないと確信しています。

そんな，全体の授業の評価としてはかなり好感触だった授業でしたが，多少気になる点もいくつかありました。それは各班，各メンバーの作業内容と作業量のムラが目立っていたことです。作業をしに行くと教室を移動したきりずっとお喋りをしていた生徒や，次回授業は対面・非対面どちらを取るかグループで決めたにも関わらず，全員集まれずに作業が滞ってしまう

様子があった様です。各自素晴らしい実力を備えているのに，目に見える態度がとても残念に感じていました。

決められたルールの中でも，「社会に出る前の練習」としてかなり多くの活動をさせてくれたなぁ，と感謝しています。これらを踏まえて，三年生から先もしっかりと自分とその先を見据えながら生活していきたいと思います。

学生Ｂ

地域活動を通して身についたものは「チームで活動する力」,「地域の特性を理解する力」の二つだ。

チームで活動する力は一般的なコミュニケーション能力のほか，多人数の情報を整理しまとめる力，仕事の分担力などが必要だ。また，リーダーに立つ場合は決断力やスケジュールの管理能力が必要になると感じた。今回の地域活動ではグループワークが多かったので，このような力を発揮する場面が多かった。また，２年最後の幼稚園訪問ではリーダーを行い，決して上手にできた訳ではないがある程度は形にすることができたと思う。反省点としては，プロジェクト全体のスケジュール管理をしたことがなく，うまく回らなかったこと，情報の伝達がスムーズに伝わらなかったこと，多人数の前でしゃべることが苦手で，的確に話せなかったことが挙げられる。今回のグループワーク，リーダー経験を通して，現在活動中の同好会で生かせればよいと思った。

学生Ｃ

ダンボールで楽しいを作ろう

地域とアートで関わるような内容だったので，私たちは，幼稚園に行って，ダンボールで作ったハンバーガーやケーキなどを，お店を作って交換するというような内容を考えました。大学から新型コロナ陽性者が出たりして，思うようには行きませんでしたが，見本を作り，ダンボールの基本の形を渡して，園児に作ってもらうというような形にできて良かったし，自分たちの活動が無駄にならなくて良かったなと思います。リーダーだけが行ったので，私は園児がどんな反応をして，どんな作品を作ってくれたのかは分からなかったけれど，この活動に参加できて良かったなと思います。

学生Ｄ

活動を通して，私は地域の人との関わりや仲間の絆を深めることができたなと感じました。グループ活動はしたことは何回かありましたが，ここまで濃く，さらに地域の人のために活動をするということがなかったので，とてもいい経験ができたと思います。

特に今回行った幼稚園訪問は，まず自分たちで「何をやるのか」を決めるところから始まりましたが，今まで先生に提示された課題をこなすだけという感じで活動をすることしかしたことがなかったため，どのようにしたら楽しんでもらえるのか，そして今回コロナ禍ということもあり，なるべく直接，近くで関わらないようにしながら交流するにはどうしたらいいのかを考えるのにとても苦戦しました。人のために何ができるのか，何をどのようにしていけばいいのかを決める能力はこれから先デザインでも活かせることだと思うので，もっとたくさん経験して身につけられたらなと思います。

ほかに今回はリーダーとして活動をさせていただきました。リーダーとしての活動は今年度何回かやらせていただいていたのですが，連絡したり意見をまとめたりはできるものの，周りの意見を大事にしすぎてなかなか率先して「これをやりましょう」と意見を強くいえないので，そこができるようになれたらなと思いました。

そして誰かの中心に立ち，しっかり仕事をすることで周りのメンバーから「ありがとう」「助かったよ」と言ってくれることが「誰かの役に立てたんだ，私は頑張れたんだ」と思えて自身にもなり，とても嬉しかったです。

デザインの仕事はしたいと思っていますが，まだ将来何をやるのか具体的には決めていません。ですが美術やデザインを生かせる地域活動をする機会ができる仕事もいいなと最近思っています。そのためにも来年度もいくつか地域と関わる活動やデザインの技術を上げる勉強をたくさんし，自分のいいところは活動に活かし悪いところは反省して，将来の就職する自分のために頑張っていきたいです。

学生Ｅ

２年生の活動では，新型コロナウィルスの影響で普段となれない形式での授業の中で幼稚園の訪問に向けて企画から準備まで全てをグループで決めて行った。私たちのグループは「モザイクアート」を使って園児と共に魚を作り，青の模造紙に貼り付けて大きな水族館のようなものを作るという企画だったが，北海道でコロナウイルス感染者が増えたことから，幼稚園にグループの代表者が素材だけ渡して幼稚園のみで楽しんでもらうことにした。そのために素材を集め，ある程度の工程をグループ側で進めておきその後の作業から園児に作業を進めてもらうことにした。そのための手

順の説明や，幼稚園に送る手紙などの制作を進めました。

私はこの活動を通して，大変な活動もクラスメイトと協力しながら楽しく活動を勧められたと思う。そしてこの経験を社会に出ても活かして行こうと思う。また，デザインが社会にどう関わりどのような効果を与えているのかをゼミを通して学べたと思っている。この活動はたくさんの友人や人との関わりを持たせてくれたと感じていて私の大学生活にとって貴重な時間だったと思っている。

学生Ｆ

２年生になってからの活動ではコロナ禍という非常な状態で，結論からいうとあまり思ったような活動はできませんでした。しかし，そんな中で北広島の幼稚園に行って活動するというプロジェクトが進められていきました。中々学校に来て対面することは少なかったものの，リモートでグループの話し合いがスムーズに進められたのは良かったことだと思っています。この様な状況でなければ，また１年の時と同じく，地域との関わりも増えて，そこから発展することもあったのではないかと思っています。

最後に，私はこの活動を通して地域や人と密接とまでは言えませんが，関わることが多くあり，その度に自分を見つめ直すきっかけになったり，新しい発見や出会いがあったりしました。結果的にはこれらの活動をして良かったと思うことの方が多く，少しだけ社会と自分の関わりを体感できて，自己の成長に繋がったかなと思っています

学生Ｇ

二年生になると，コロナの影響でまず学校に行けませんでした。最初から活動が制限されていました。リモートで，グループで話し合いながら，何をするか決めました。しかしコロナの影響で最終的には当初の予定とは全く別のものを作ることになりました。最初は段ボールで家を作り，そこにデザインした模様に穴を開けて，そこに幼稚園の子供たちにカラーフィルムを貼り，ステンドグラスハウスをみんなで作る，という計画でしたが，グループメンバー全員が幼稚園を訪問できないこと，コロナ対策で密集することを避けるために全てを取りやめて，全く新しく，紙で作ったスノードームの製作キットを作って，幼稚園に送るという形になりました。結果的には，喜んでもらえたようなのでよかったのではないでしょうか。

この地域活動を通して，地域の人々，子供たちとの交流の楽しさと，喜んでもらうことの嬉しさを学べたのではないかと思います。一年から二年になって地域活動を自分たちで考えてやってみるということに挑戦して，企画の難しさも学べたと思います。次やるならゴミ拾いとかも楽しそうだなと思いました。

学生Ｈ

この活動を通して，小さなことではあるのですが，例えば今回の幼稚園に向けた活動では，私たちＣグループはお菓子の箱や布切れを使ってリサイクルモザイクアートをすることになったのですが，その際に北広島のゴミの実態を知ることができ，自分のゴミ出しに対する意識を変えることができました。これが１番この活動で変わったと思う点です。

反省点は，今回の幼稚園での活動でリサイクルモザイクアートを行いましたが，モザイクの部分はリサイクルにはなっていましたが，台紙は新たに紙を使って作ってしまったため，完全にエコにはならないということをもっと早めに気づけることが出来れば良かったという点です。この反省から，活動内容を考える際に矛盾が無いかどうか確かめていくことが重要だと学びました。これから活動内容を考える機会があるので，この学びを活かし，より良い活動が出来るよう努力しようと思います。

学生Ｉ

二年生の活動は各グループに分かれて，それぞれで活動内容を決めるというものだった。私のグループでは，幼稚園に訪問してワークショップを行うという活動を提案した。二年生の前期は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で休講期間が続き，ほとんど活動できない状態だった。しかし，リモート授業という形態を用いて授業が再開された。相手の表情や姿が直接確認できなくなると，コミュニケーションを取るのが非常に難しくなるということを知ることができた。コロナ禍の影響で当初の予定していた活動はできなくなり，代替案を出さなければいけなくなり活動が頓挫した。こういった感染症が猛威を奮っている状況では，軽はずみな行動が多くの方々に影響を及ぼすことも学ぶことができた。当初は幼稚園に行くことは危険ではないかと考えていたが，少人数で訪問することで活動を再開できたので結果としてよかったのではないかと思う。これからワークショップを企画することがある際は，リモートでも活動できるかどうかを念頭に入れて考える必要があると思う。そういった点でも，この２年間の活動意味のあるものだったと思う。

学生Ｊ

２年次は新型コロナウイルスの影響が大きく，戸惑う点も多々あったが，初期の案だしで先のことを見据え３密を避ける企画にすることを提案，無事狙い通り当日に発表することができた。当年度ではリーダー役を務めず管理役の仕事がなかったので，ストーリーの原案や全体の監督など，制作物に関する主要な構成を練ることに積極的に参加した。また，子供たちにわかりやすく，なにより楽しんでもらえるということを第一に考えた結果，実際の発表ではそれが実現していたようなので良かった。

全体を通して，活動の中で重要な仕事の多くを担えたと思う。クオリティを重視しながらも，個人ではなくグループワークであることを意識し，適度な距離感で仕事ができた。

□反省点

取り留めて反省する点はないが，強いてあげるのであれば，班員との距離感をうまく模索できず，自分本位に行動していたことだ。基本的には良いものを出来るだけ少ない労力で，ということを頭に動いていたので，どこかストイックなときもあれば，手抜きをしているようにも受け取られるような状態だったかと思われる。少ない労力を求めていたという点で，他者を深く理解するには個人的にかなりの労力が必要と感じていたため，深くまで探ろうとしなかったり，より深い交流をもって結束力を高める努力はしていなかった。ときには言いたいことを言えずにいた班員もいたと思うともう少し努力していれば良かったと思う。

□これから

グループワークは勿論だが，一番これからに役立つこととして身に付いたことは企画し実行に移す力だと思う。２年間の活動の中では 5W1H をベースに企画を考えた為，よりニーズに沿うような内容になっていたと感じる。これはこれからの自分の制作のみならず，実社会においても役立つものだと思うので実践し続けていきたい。また，反省点であった他者との距離感の取り方もこれからの生活の中で意識し，模索しながら改善していきたい。

学生Ｋ

集団で動くこともメリットや楽しさ，達成感も感じている。一年生のときのふるさと祭りでは大変なことも多かったがとても達成感があり充実したことを覚えている。だが，強く印象に残っているのは反省点の方だ。集団として動く以上仕方の無いことだが，苦手な役回りが回ってきたことや，ミスや不手際の始末やフォローに難しさを感じた。今年はコロナ禍の影響で，ダンボールアートでは上手くいっていたことができなかったり，先が予測できなかったりと色々な難点があった。コロナ禍についてもっと注意深く把握し，どんな形になっても変更点が少なくなるように手を回しておくべきだったと思う。加えてリーダー不在によって作業が止まってしまったり，連絡が行き届かない場面が多かったので，そうなることが予測できた時点で対応すべきであったと反省している。リーダーや副リーダーでないからと積極的に動かなかったところが１番の反省点である。

最後に，地域活動を通して学んだ多くのことは，これからに活かしていくことの出来ることだと思う。今回の成功や失敗を今後の学校生活やその先へ活かせていこうと思う。

学生Ｌ

自らグループリーダーを名乗り出て活動を行った。高校の頃から部長などは経験していたが，この学内に置いてリーダーをするのは初めての経験だった。

幸いグループメンバーにも恵まれ，協力して活動を行うことが出来た。協力的とはいえ企画書の作成等はグループのメンバーと相談に乗りつつ，実際の魚を作る作業を同時進行させたりなど難しいと感じるところもあった。リモートが多く一人一人の作業が見て把握出来ない中にしてはしっかり対話できていたように思う。また，企画案などリモートで話し合う時，進行をきちんと行えてた。その結果話は早めにまとまり，作業や，内容にすぐ移れたのはとても良かった。

反省点としては，幼稚園に行く時の時期がズレた時の対応がもう少し上手くできたのではないかなと思う。できた物自体には全く不満はないがもう少し捻りがあっても良いと思った。また，データの不備が目立ったので次回このような機会があってリーダーをすることがあれば改善したいと思う。また素材などの管理がちょっと遅かったのでもう少し，明確に数を提示して作るべきだったと思う。

当日の幼稚園訪問の時は言うべきだった台詞が緊張で幾つか飛んでしまったのが，大きな反省点。メディアによる取材は小学生の時以来で，取材の仕方聞き方がこのような感じなのか，上手だな，と新たな発見を得られたと思う。

活動を通して，地域の人々と関わること，触れ合うことは楽しいと思った。そして，リーダーだったり，企画を考えたりする事の難しさ，そしてその方法を学ぶ事が出来た。この活動では他の科目で養うような技

術面と言うよりは，知識面として成長できたように思う。今回の反省点，良かった点を見直して今後の活動に役立てていきたい。

学生 M

二年生の活動は最初のほとんどが遠隔だったけど，グループでしっかり仕事が出来ていたと思う。

遠隔でも，うちのグループはリーダーがしっかり仕事を割り振ってくれたり，手伝ってくれたり，他のメンバーもみんな各自の作業をしっかりやってたから，わりかしスムーズに進んだと思う。

グループみんなで幼稚園に行くことは出来なくなったけれど，作業自体が無駄にならなくてよかったと思う。活動で反省するところがあるとしたら，作品の完成が締め切りギリギリになることが多かったこと。活動のまとめとしては，いろいろと苦戦することが多かったけれど，楽しみながら作業することも出来たからよかった。

学生 N

私はこの活動を通してこれまでの中学，高校の授業形態とは大きく異なるものだということを感じた。まず１つ目は，学生主体となって授業を進めていくことが基本であるということだ。高校までの授業では，教師が全体的な説明や進行をし，生徒はあくまで受け身に与えられた課題をこなしていくということが常であった。だが大学に入学してから，特にこの基礎ゼミという授業では学生たちが自らグループの話し合いや活動の方針を決め，計画から実行まで移し，改善点や良いと感じた点を上げお互いにより深く意見を交えていくのが基本的なことなのだなと感じた。もちろん最初は中々自らの主張ができず，意見を通すことが難しいと感じてしまう場面が多々あった。だが，少しずつ活動を進めていく中で自分の希望していた活動が採用されなかった時や不満が生まれたときに，自分から発言をしていかずに受け身となっているだけのままの者に不満を言う権利など無いのだと気が付く事ができ，それからはなるべく積極的に意見を出来るよう心がけ，どうしたら相手に意図を伝えることが出来るのかよく考えることが出来るようになった。そして２つ目は行動が更に直接的だと言うことである。高校での授業は実際に現場に行くのではなく，現場へ赴いた場合にどうするかのあくまで想定をしてまとめていくだけというものが多かったが，大学の授業で実際に地域の夏祭りへ行き地元の方々とふれあい，幼稚園で幼児たちと一緒に活動をすることでより深くその地域の問題や営みに寄り添い考えることが出来るのだなと感じた。そしてこの授業での経験を生かし，今度は自分の住んでいる地域のボランティア活動に参加し，より自ら考え問題を解決していく力を延ばして，広げて行きたいと思った。

学生 O

第一に，社交的な力である。学科の人数が少ないとはいえ，普段から関わる人物は限られていたので，普段関わらない人ともコミュニケーションを取り，協力して物事をやり遂げる事が出来た。また，自ら積極的に話し合いの進行や仕事をこなすことで，積極的に仕事に向き合う姿勢に磨きがかかったと考える。これを経て，グループワークでの活動は非常に良い経験になったと考える。大学を卒業し，企業でも複数の人間と様々な企画や制作をする機会が，現在よりも遥かにコミュニケーション能力を試される機会が多くなる。ここで，身に付けた社交性は，将来に大きく活かせるものであり，人間関係の幅を広げる事ができる。そこから新しい発見や繋がりを見つけることができ，良好な社会生活にすることができると考える。

第二に，大きな物事をやり遂げる達成感である。この活動では，幼稚園でのワークショップなどボランティアの活動が中心的である。主に，グループごとに一から企画を練り，ボランティアのための作品を制作していた。また，企画を実行するために，自らの足で幼稚園や夏祭り会場に出向くことも実現されたのである。個人的に，幼稚園のボランティアが非常に印象深いものであった。グループで協力して作り上げた企画で，沢山喜ぶ園児の顔を見て，努力して良かったという喜びと達成感が，今でも印象に残っている。今後は，仕事でも人々に提供するような場面が来ると考える。その際は，今回の経験を踏まえて，人々に喜んでもらえるという気持ちも忘れないようにしようと考える。

学生 P

二学年に上がってからの活動は，ゼミの中でチームにバラけて，グループ活動を行った。内容としては，一学年の頃行ったダンボールアートをヒントにして，ダンボールでケーキ，ハンバーガー，ドーナツの素材を作り，幼稚園児達に遊んでもらうというものであった。しかし，グループ活動を行ったと言っても，コロナ禍の影響により，積極的に前へ出るような活動は出来ず，ちゃんと活躍できたという実感は少ない。幼稚園にはリーダーだけに行ってもらった。もちろん，仕事の分担はきちんと行い，みんなアイデアやその工夫案を出し合ったりして，誰か一人だけが負担になっている状況にはならなかったと思うし，作業もちゃんと

学校内や自宅でこなした。

しかし，一学年の頃に比べると，大学祭など大イベントがなかったことも相まって，二学年のこの活動の実感が少ないのである。これに関しては誰のせいでもなく，コロナウイルスが原因であるため，早く少しでも収まって欲しいと思った。ゼミの活動を通してコロナ禍による影響を痛感したのである。

この活動で，これらの事を感じた。みんなで協力し合い活動をこなしてこられたことは何より嬉しかったし自分の中で大切な経験になった。また，大人になればなるほど，人間関係の形成は重要なものになっていくことを学んだ。二学年の活動は心残りがあるが，コロナ禍というのを前提において限られた中で何をすることが出来るのかをみんなで案を試行錯誤し作り上げたのは，確かに自分の力になったと思う。

学生Ｑ

２年目の班の活動では正直私はなにかやったかと言わると，頭を抱えてしまうほどなにもやっていないように思えます。物語もうまいこと作ることができませんし，絵も子供が好きそうなものを描くことができませんし，パソコンも得意ではないのでうまく動かせない人です。班の人がそれぞれそういったことができる人たちだったので任せてしまう形になってしまいました。せめてもと思い，幼稚園に行ったときに担当した３役の声を変えてみました。園児たちには笑ってくれた子もいたように思えます。少しは班の一員としてのことはできたと思いたいです。本音としてはもっとできることがあったのではとか考えました。５人で幼稚園に行って読み聞かせたかったです。なんだかんだで，コロナ禍であまり集まって相談や作業できない中自分の班も他の班も今できる最高のものができたのではないかと個人的には思っています。

思い返せば良くも悪くも何もやっていないなと思っています。仲間に頼りきりだったり助けてもらってばかりでした。いつも誰かの後ろに立っていました。でも，私は後ろでひそひそと作業して，前の人を支えていきたいなと思っています。自分にできることを精一杯やってきたつもりで，これからもそんな感じでやっていくと思います。なんだかんだで，いろんなことを経験できました。

学生Ｒ

私はこの活動の中で多くのことを学びました，その中でもチームで活動することの難しさと自分の不甲斐なさ，弱さを痛感しました。そう感じたのは２年目の幼稚園ワークショップでのことです，１年目の活動は祭りへの出店と先生が企画して下さった幼稚園でのワークショップがメインでしたので，予定通りに決められたことを進めたり，ある程度指示に従って活動することが多かったのであまり深く考えずに行動してしていましたが，２年目の活動では企画の段階から自分達で目的やターゲットを決めそれに合わせた企画をあらゆる事を考慮して決めなくてはいけませんでした。その上自分はリーダーにまで立候補していたので。なおさら自分で事を動かさなくてはなりませんでしたが，僕はその事をあまり重視せずに人に頼っていたところがありました。そしてそのせいで，企画報告や企画書の提出は遅れチームのメンバーや先生を不安にさせ迷惑をかけてしまいました。そのことから，全ては自分の精神の弱さと怠惰な性格やチームメンバーにでさえ仕事を押し付けるのは悪いと思い込み自分で抱え込む癖のせいだと感じ，自分はどうしようもなくだらしない人間であると自覚することが出来ました。本当に申し訳ありませんでした。

社会に出てからはこんな事があっては絶対にいけないので，これからは嫌でも多人数での活動を増やしコミュニケーション能力や期限まで仕事を終わらせる力をつけようと思いました。

自分を振り返る機会を下さった基礎ゼミには感謝しています。そして，いつか１年目の活動のように自分が関わったプロジェクトを成功させられるように人間になりたいです。

学生Ｓ

２年生になってからの活動は，コロナ禍の影響であまりなかったのですがデジタル紙芝居を制作しました。イラストは全て私が制作してアニメーションと効果音は他のメンバーがやってくれました，発表当日は新型コロナウイルス対策のため，人数の関係で私は行けませんでしたがうまくいったようでよかったです。新聞の今回の活動が載っていて，私が描いたイラストがちょこっと映っていてちょっとドキッとしました。この活動で私はあまり多く活躍出来なかった気がしますが，作品制作など黙々と仲間と作業するのがとても楽しくて良い経験になりました。

７．まとめ

今回キャンパスの閉鎖や全面リモートでの授業実施等，過去に経験したことのない対応を余儀なくされた学生活動がコロナ禍だとしても学生の学びを止めないように続けていくための新しい学生活動のあり方の検討課題

について考察してきた。

事前学習期間に関してはすべてがリモートのみの活動となる中で他の学生との関わりが十分に行えない状況下で活動の企画や立案を通じて，他の学生との関わりありを模索していく様子が個々の学生間に読み取れた。

大学がアクティブラーニングを推進し，学生地域活動と結びつけていく理由は学内での学び以外に外部での活動が学生の学びの成長に大きく関わっている点である。

大学から社会へと移行する重要な時期であり，社会に出るために必要な力を身につけ自立することが必要とされコロナ禍などの予測困難な時代を生きるこれからの学生達にとっては，学内だけの限られた学習のみならず，学内では会うことができない様々な社会人と触れ合い，いろいろな経験と通しながら十分な；コミュニケーション能力を備える必要がある。

そうした学生時代の貴重な経験が学生の学びと成長に大きく寄与している。

短い大学生活という時間の中で，学生が学外での自主的な地域活動を選択することで，学生の学びや成長は大きく変化していく。初めは興味なさそうな活動が学びへの意欲を掻き立てたり，試しに関わってみた活動が楽しくやりがいを感じたりと関わることで大きな変化をもたらすこともありうる。

活動で様々な人や物が複雑に絡み合う場所を経験することにより，授業の中だけでは学びきれない要素が多くあることを再度認識し，さらなる課題の取り組みにより考察を深めていきたい。

参考文献

・国立青少年教育振興機構（2020）「大学生のボランティア　活動等に関する調査」https://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/142/File/zentai.pdf

・中央教育審議会答申（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyoO/toushin/1325047.htm

・山田皓久編著（2019）地域連携活動の実践　大学から発信する地方創生　海青社

・総合研究開発機構（2007）「学生のアイデアとパワーを活かした魅力ある地域づくり」，NIRA 委託研究報告書

・柾本伸悦（2011）I 学生プロジェクトにおけるマネジメント研究　プロジェクト参加動機の推移「広島経済大学研究論集」第 34 号弟 1 号広島経済大学

・宮嶋達也（2020）地域活動における学生の自己評価と課題　―アートプロジェクトを事例として―「星槎道都大学研究紀要　美術学部創刊号」

Evaluation and problems for Students through Community Activities Under the influence of the new coronavirus

― case study on the art project II ―

MIYAJIMA Tatsuya

Abstract

As the spread of the new coronavirus continues to require self-restraint, local activities cannot be carried out there.

Workshop activities are often Three Cs and It is difficult for Face-to-face activities at venues and Exchange activities with people and The Corona disaster also influenced by these activities.

Under these circumstances, thinking about the activities that can be made by COVID-19 Pandemic, how do we realize these activities etc.

While facing with various problems, we sought how to proceed with community activities.

In an environment is different from the usual, we will try to expand the circle of Intergenerational exchange and in this paper, I discuss the influence and problems of COVID-19 Pandemic on community activities.